

# ほにゅう 哺乳類

大分市には標高の高い山がないため、モモンガやヤマネ、カモシカなど高山(く)の多くの種が生息しており、外来種を含めると39種の哺乳類が確認(か

性の哺乳(ほにゅう)類は生息していませんが、田畑やため池などがある里山環境においては比較(ひか)くに)されています。その中でも実際に目撃(もくげき)することが多い9種を掲載(けいさい)します。

絶滅 EX

野生絶滅 EW

絶滅危惧ⅠA類 CR

絶滅危惧ⅠB類 EN

絶滅危惧Ⅱ類 VU

準絶滅危惧 NT

情報不足 DD

絶滅のおそれのある地域個体群 LP

**1 ホンドタヌキ** [生息場所] 里・山 街中  
頭胴長: 40~50cm  
体重: 3.5~4.5kg



雌雄(しゆう)のつがいで行動します。全身の毛がぬげ落ちてしまうカイセン症(しょう)を発症します。空き家や寺社のき下などをすみかとし、雑食性で、は虫・両生類や昆虫、鳥類、果実や種子などを食べます。日本にのみ生息する固有種で、おどろくと死んだふりをします。

**2 ホンドギツネ** [生息場所] 里・山 川  
頭胴長: 52~76cm  
体重: 4~7kg



単独行動で広いなわばりの中をパトロールします。肉食よりの雑食性で、ネズミやウサギ、鳥類を食べます。大分市においてはタヌキよりも個体数は少なく、大野川周辺の田畑でしばしば目撃されます。

**3 ニホンテン** [生息場所] 山・里 林・草原  
頭胴長: 42~47cm  
体重: 1.1~1.3kg



冬の毛がわりで、胴(どう)部の毛の色はかっ色から黄色に、顔中心部は黒色から白色になります。雑食性で、小型哺乳類・は虫類・昆虫・植物・果実までは幅広く食べます。樹上(じゅじょう)生活を得意としており、なわばりを持ちます。

**4 ニホンイタチ** [生息場所] 里・街中 山  
頭胴長: ♂27~37cm ♀16~25cm  
体重: ♂290~650g ♀115~175g



オスがメスよりも約3倍大きいという性的サイズ二型をします。ネズミを多く食べるため、イタチが減るとネズミが増えます。肛門(こうもん)の左右に臭腺(しゅうせん)を持ち、きけんを感じるに独特のにおいがする液体を霧吹(きりふき)状に噴射(ふんしゃ)します。

**5 ニホンアナグマ** [生息場所] 山・里 林・草原  
頭胴長: 50~75cm  
体重: 4~8kg



すどく太いツメで穴をほって巣を作ります。イタチの仲間雑食性。目は悪いですがすぐれた嗅覚(きゅうかく)を持ち、すりばち状の穴をほってミズをピンポイントでほり当て食べます。慣用句(じょうご)の「狸(ね)が同じ穴(あな)の貉(むじな)」の貉(むじな)はタヌキとアナグマのことで、両種が同じ穴を共有してすみかとすることが由来です。

**6 ニホンイノシシ** [生息場所] 山・里 林・草原  
頭胴長: 110~160cm  
体重: 50~150kg



休耕田(きゅうけいでん)や林内のヌタ場で転がって体表に泥(どろ)をぬり、ダニなどの寄生虫を落とします。雑食性ですが、主に地中にある植物の根や、タケノコ、ヤマイモなどを鼻先でほって食べます。ススキやカヤ、クズなどを利用してドーム状の巣を作ります。

**7 ニホンジカ(キュウシュウジカ)** [生息場所] 山・里 林・草原  
頭胴長: 90~190cm  
体重: 50~200kg



オスの角は毎年3月に自然に落ち、4月ごろから袋角(ふくらづつ)のとよばれるピロッド状の皮ふがついた状態で新しく生えてきます。3歳(さい)までは角の枝分かれの数で年れい(ねんれい)が分かります。草食性でイネ科の草やササ、堅果(けんか)を食べ、150cmをこえる跳躍(ちやうやく)力を持っています。

**8 ニホンウサギ(キュウシュウウサギ)** [生息場所] 山・里 林・草原  
頭胴長: 45~54cm  
体重: 1.3~2.5kg



雪がつもる地域では冬に体毛の色が白色となりますが、キュウシュウウサギは、一年中かっ色です。完全な草食性で草から木まで多様な植物を食べます。野生下での寿命(じゅめい)(じゅめい)は1~2年と短いですが、肉食(じゅうじく)や猛禽(もうきん)類のエサとなり、生態(せい)せいたい)系の重要な役割(やくわり)をになっています。

**9 ニホンザル** [生息場所] 山・里  
頭胴長: 50~65cm  
体重: 6.5~15kg



昼行性で10~100頭ぐらゐのむれを作り生活しています。雑食性で昆虫や甲殻(こうかく)類、果実や葉(は)つきを食べます。野生下での寿命(じゅめい)は約20年で、群れの中にきびしい順位(じゅんゐ)関係(かんけい)があります。「高崎山(たかさき)のサル生息地(せいじち)」は国の天然記念物(てんぜんきねんぶつ)に指定されています。

写真提供: ①~⑨ 森田祐介

## 哺乳類のあしあと

哺乳類

### COLUMN 野生動物と農業被害(ひがい)

近年、大分市において森林や野山は、住宅や工場を建設するために開発が進み、野生動物が生活を保つための食料や寝床(ねどこ)を確保するためには、絶対的に広さが足りていません。タヌキやキツネのように古来より人間の生活圏(けん)の中で生きてきた種もいますが、イノシシやシカ、アナグマのように、数十年前には山奥(おく)でしか見られなかったものが、人間の家のすぐ近くで見られることが多くなり、経済(けいぎ)的(てき)な損失(しんじつ)も増えています。とくに農業被害(ひがい)では、家庭菜園(かていさいえん)など農業を小規模(せいご)に(さ)ぼ)に行(い)う人(ひと)ほど被害(ひがい)感情(かんじ)が大きく(お)おこります。ここで考えたいのが、農作物(のうさくぶつ)を食害(じくがい)する動物(どうぶつ)は本当に悪(あく)いのか(か)ということ(こと)です。生息(せいじ)できる山林(さんりん)はせまくなり、食料(じきりょう)の確保(たも)がむずかしくな(な)っていますが、何(なに)の防衛策(ぼうえいさく)もして(し)ていない人間(にんげん)が耕(か)す

畑(はたけ)では、山(やま)では得(と)られるはず(はず)もない高(たか)栄養(えいよう)養(やう)分(ぶん)、高(たか)糖(とう)度(ど)の作物(さくぶつ)がかんたんに手(て)に入(い)ります。農作物(のうさくぶつ)を食害(じくがい)するのはある意味(いみ)、野生動物(せいじやうどうぶつ)にとつては自然(しぜん)な行(こう)動(どう)とも言(い)えます。農作物(のうさくぶつ)を食害(じくがい)した野生動物(せいじやうどうぶつ)は、有害鳥獣(ちゆうじゆう)と名(な)を変(か)え、駆除(くじょ)されるべき対象(たいさう)に変わ(か)ってしま(ま)います。人間(にんげん)も生活(せい)して(し)てい(い)く上(かみ)で増(ま)えすぎた野生動物(せいじやうどうぶつ)を駆除(くじょ)することは仕方(しかた)ないこと(こと)ではあり(あ)りますが、適切な防衛策(ぼうえいさく)(てい)ちがな(な)な(な)な)をして(し)てい(い)れば、食害(じくがい)を受けず野生動物(せいじやうどうぶつ)は野生動物(せいじやうどうぶつ)のまま生(なま)を全(ま)く(ま)つ)うで(で)きるの(の)ではない(は)い(い)で(で)しょう(しょう)か。食害(じくがい)をふせぐこと(こと)は、野生動物(せいじやうどうぶつ)が自然(しぜん)の姿(すがた)で生(なま)きて(て)い(い)くこと(こと)を助(たす)けること(こと)でもあり、人間(にんげん)と野生動物(せいじやうどうぶつ)が適切(ていじ)なさ(さ)より(より)で共存(きゆうぞん)すること(こと)にもつな(な)が(が)ります。今(いま)一度(いちど)、野生動物(せいじやうどうぶつ)と人間(にんげん)の関(かん)係(けい)を考(かん)えて(て)み(み)ま(ま)しょう。